

カミのいない日

薛 富肇
XUE FUZHAO

いい朝だった。私は目を大きく開けようとしているが、朝の光がまぶしくて、思わず目を閉じていた。その代わりに、元気なあくびのこえが部屋中に響いていた。母はその声を聞こえたようで、満面の笑みで私におはようと声掛けた。

私は重いからだを必死に動かして、小さいなベットから降りた。今日は何をしようかと考えていると同時に、ベットの見本誌がとっさに私の目の前に現れた。私は知らず知らずのうちに、その本をめくり始めた。その本には、目が眩むほど、物凄くたくさんのベットがあって、高いものや安いものはもちろん、喉から手が出るほど、綺麗で、尊いようなベットも載っていた。それが欲しいと私が思った。しかし、お金が足りないのは大きな問題だった。「とりあえず仕事を頑張ろうか！」と、自分を元気づけをするような大声を出した。

朝ごはんを食べて、朝の準備も終えて、仕事場に向かおうと玄関まで来た。靴をはきながら、母からのあたたかい弁当箱を雑に手に取って、出発した。私の仕事場は採掘場だ、ここでは、上質な大理石を次々と工場に送って、様々な商品に化していくのだ。仕事場についた、私は一刻も早く、この強い日差しのしたから逃げようとして、自分の仕事場だったブルドーサーに逃げ込んだ。仕事内容は簡単だ、商品にはならない大理石の切れ端を崖の下にぽいと捨てるだけだ。簡単とはいえ、続々と現れてくる切れ端を全部処分することも大変な仕事なのだ、何回往復したのかを数えることを諦めて、あこがれのそのベットのために、ひた

すら石を捨て続けていた。

定時になった、私は自分の座から降りて、家に帰ろうとする時、上司に呼ばれた。疲れたせいか、いつもより重く感じている両足で事務室に入った。上司は、自分と隣で並んでいる数人に向かって話をはじめた。ここ数年の不況で、工場で生産した大理石で作られた高級ベットが売れなくなっているから、給与が現物支給になるという話だった。隣の皆は渋々と頷いたが、私は喜びを隠しきれなかった、何せあのベットがまさかこのような形で手に入れることになるとは、思ってもみなかった、しかも、すでに届いているようだ。事務室から出で、私は軽い足取りで家に戻った。

広いベットの上でゴロゴロしていた。母がいないからご飯はどうしようかなと思っていながら、このベットにふさわしい高級ふとんについて考えていた。大理石で作ったベットだから、冷たいのも仕方がないことだ。ベットをつめたさを感じているなか、深い眠りに入った。

カミは目を覚めた、いい夢を見たと思った。そして、カミはそれ知ることができた、一生懸命働いて、それでやっと得た物のつめたさ、それと、身近いにいながら、感じることもないあたたかさ。